

オオカミ部長のお気に入り

目次

オオカミ部長のお気に入り

5

幸せの足音

271

オオカミ部長のお気に入り

「ご利用ありがとうございます」

窓口で丁寧に頭を下げ、戻したタイミングで銀行のロゴの入った手元の番号機を確認する。表示された数字はゼロ。ロビーを見回してもお客様の姿はなく、銀行の案内役として出入り口につくコンシェルジュも暇そうに欠伸を噛み殺していた。

ちらりと見上げた時計の針は、三時五分前。ほっとして、ようやく私——宮下和奏は、肩の力を抜いた。一応誰に聞いても知っている大手銀行に運良く新卒で就職し、希望が通り地元の支店に配属されてはや四年の二十六歳。既に仕事には慣れたけれど、そろそろ転勤になるかもという微妙な年数なので、異動時期の四月を前に、一月のこの時期はちよつと落ち着かない日々を過ごしている。

……凝り固まった肩をほぐすために伸びをしたいけれど、まだお客様が来るかもしれないから、もう少し我慢。

忙しい給料日前でも締め日前でもないので、お客様の出入りもそこそこの平和な一日だった。

金曜日の今日は終業時間が近付くにつれ、なんとなく浮き足立ってくる。窓口を閉めるべく手元の書類に不備がないかを確かめっていると、ロビーが急にざわめき出した。

「あら、珍しい」

何だろう、と首を傾げるよりも先に、隣の窓口にいた松岡さんがそう呟いた。

彼女の視線を辿ってロビー入り口を見ると、長身の男の人が立っていた。

「オオカミ部長だ」

どこからか漏れた囁き声に、私はざわめきの理由を知り納得する。

ちよつと好みが分かれそうな近寄りが見たい雰囲気はともかくとして、その目鼻の彫りは深く、文句なしに整っている。少し大きくて厚い唇が、男っぽい色気を醸し出していてセクシー……なんて誰かが飲み会の席で熱弁を振るっていたっけ。確かにイケメンだし、横を通ったら振り返ってしまいうような存在感がある。

とにかくそんな彼が颯爽とカウンターの向こうを横切っていった。シトラス系にちよつとスパイシーしさを混ぜたような、いかにも『できる男』という感じの香水の香りが一瞬だけ残る。長めのグレーのコートの裾を翻して歩く姿は、高級ブランドの広告みたいに見える。待っていたらしい支店長に挨拶をして、そのまま話し始めた彼を、ちらちらと盗み見ている女子社員は多い。

そばにいる窓口サービス部部长——略して窓サ部長もコートを着ているので、これから外に出るのだろう。

オオカミ部長と呼ばれた彼の名前はもちろん、月に吠えるあの狼ではない。フルネームは『大神蓮』といって、この支店の法人営業部の部長だ。そう。本当は『オオカミ』じゃなく『オオガミ』

なのである。

なのにどうして彼が『オオカミ』と呼ばれるのかというと、話は彼がこの支店に異動してきたときまで遡る——

やり手と名高いうちの支店長が、本社時代にヘッドハンティングしたらしい彼は、この支店に赴任する前から顔が良くて仕事もできると評判だった。しかも支店長と仲が良く、休みの日なんかと一緒に飲みに行ったりゴルフをしたりする関係——つまり上の覚えもよろしく将来有望。そのうち独身でかつ恋人もいないということがわかり、一部のアグレッシブな女子社員が、彼の恋人の座を射止めるべく、一斉に照準を合わせたのである。

この支店に異動してきた後には連日のプレゼント攻撃にデートのお誘い、その他諸々。用もないのに法人営業部があるフロアを数人の女子社員がうるちよろするようになってしまった。そんなあまりのモテっぷりに、若手の男性営業の不満が溜まり、やがて業務にまで支障をきたすようになり……とうとうキレた大神部長本人が『そんな暇があるなら仕事しろ！』と、荒っぽく彼女達を一喝したらしい。その迫力に一瞬にして、女子社員どころか社員全員がフロアから消えたとか消えていないとか……

ライオンならぬ、狼に睨まれたねずみのような心地だった——とのちに、その場にいた社員が呟いたことで、それ以来若手社員達は彼のことを敬愛と畏怖を込めて『オオカミ部長』と呼び始めたのである。彼の肉食獣っぽいワイルドな雰囲気も相まって、今や上役の人までそう呼んでいるそうだ。

フロア中の注目を浴びながら、大神部長が支店長、窓サ部長とともに再び私の前を横切る。私が座っているせいもあるけれど、顔を見ようとしただけで首が痛くなるほど背が高い。

……ほんと、まさしく天上人って感じ。

奇しくも所属する部署のフロアも遙か上。法人営業部は七階にあつて、一階の窓口で働く私は立ち入ったことすらないのだ。

「また大きな契約取ってきたらしいよ」

「さすがあ。今年も本社から報奨金出るかな」

そんな女の子達のおしゃべりをBGMに、私はチェックし終えた書類をトンと机の上で揃える。

よし、今日も不備はなし、と。

「相変わらず宮下さんは色恋沙汰に興味ないのねえ。オオカミ部長よ、あんなにカッコイイのに！ちよつとくらい、ときめいたりしないの？」

いつのまにか顔を覗き込まれていて、その近さにびっくりする。松岡さんは「あら失礼」と顔の位置を戻し、椅子を引いた。

「もう、びっくりさせないでくださいよ。……大神部長ですよ？ 普通にかっこいいと思いますよ？ だけど世界が違いすぎて恐れ多い感じです」

そう私が返事をする、松岡さんは呆れたように溜息をついた。

「猫と引き籠もってばかりいないで、たまには宮下さんも合コンとか行きなさいよ」

松岡さんは私の胸ポケットに差さっている猫のボールペンを指さして、訳知り顔にそう言う。

同じ課長の下についている彼女は、私が新人だった時、教育係だった人だ。何かと馬が合って、部署が違う時も時々連絡を取り合っていた。彼女がこの部署に異動してきた時は頼もしく思ったものだけど、付き合いが長い分、遠慮がない。すでに二児の母で幸せな家庭を築いている彼女曰く、干物を通り越して世捨て人になっている私が心配らしい。

……余計なお世話だけど、反論すると長くなるのも、長年の付き合いからわかっているもので、私はいつもと同じ言葉を返した。

「恋愛とか面倒ですし。モコとカイと遊ぶのが、唯一の楽しみなんですから、全否定しないでくださいよ。あ、写真見ます?」

書類を置いて前のめりになった私に、松岡さんは嫌そうに身体を引いた。

「いい、いい! タイムラインで流れてくるので十分。お腹いっぱいだから」

「えー載せていないのも、いっぱいあるんですよー」

こういうところが猫馬鹿と言われる由縁なのだろう。だけど隙あらば、ウチの子自慢をしたくするのは猫飼いあるあるだ。

松岡さんはお手上げとばかりに肩を竦めてみせる。ちなみに言い訳じゃないけれど、タイムラインにはそれほど流していない。あくまで厳選した写真だけである。

「二番窓口集計終わりましたー!」

そんな言い合いをしているのにもかかわらず、松岡さんは手際よく書類をまとめて後ろに報告する。

……無駄口叩いててもこの速さだもん。さすが勤続二十年の大先輩。見習わなくては。

でもまあ、うまいこと恋愛話をうやむやにできたのは幸이었다。松岡さんは、ことあるごとに話を恋愛方向に持つていこうとするので要注意だ。一度そちらに舵を切られると話が長い。

そもそも大神部長の赴任当初ならともかく、今きやあきやあ騒いでいる若い子達は、本気で大神部長とどうにかなりたいたいわけじゃないだろう。その証拠に怒鳴られて以来、みんな一定の距離を保って彼と接しているし、騒ぎ方だってテレビの向こうの芸能人に向けるものと同じだ。

さつき颯爽と歩いていった大神部長の伶俐な横顔を思い返す。

確かにイケメンだし仕事もできるし独身だし、騒ぎたくなる気持ちはわかる。ついでに言うと、声も高すぎず低すぎない、よく通るイイ声なので、私的ポイントも高い。

でも現実問題として、あんな色々な意味ですごい人が恋人だったら、絶対気が抜けて疲れると思うんだよね。かっこいいけれど、雰囲気も背の高さも威圧感があるし……付き合い相手にも同じスペックを求めてきそう。それに何より、一緒にいてちっとも癒されないし。

土日に愛猫とごころごろしているのが至福の時間だと思っっている私としては、そのところは譲れないポイントだ。

いや、うん。そんなことを考える前に、釣り合わなさすぎてあちらからお断りだろう。そもそも百五十センチしかない身長をヒールでどうにか誤魔化している私と並んだら、親子にしか見えないかもしれない。

……そういえば、足が痛い。

新しくしたばかりのヒールの高い靴からちよつと踵を浮かせて、心の中で溜息をつく。

そして頭を切り替えて、オートキャッシュャー——お客様から預かったお金を入れておく機器から現金を取り出して数え始めた。こういう作業は面倒だけど無心になれるからいい。表示されている数字と合わせ、よし、と確認する。

「三番窓口、合いましたー！」

「あら……随分元氣ね」

若干気合のこもりすぎた声に、ちよつど後ろにいた課長が足を止めて苦笑する。

慌てて謝る私の頭からは、大神部長のことなどすっかり抜けていた。

——だけど世の中というものは、案外意外なところで繋がっているらしい。

そんな言葉がぴつたり当て嵌まってしまふ出来事が、その二日後に待ち受けているなんて、この時の私はもちろん想像もしていなかったのである。

「ただいまー！」

仕事を終えて、愛する猫が待つ我が家に帰る。

私が住んでいるのは、勤務先の銀行から二駅離れた、五年先には取り壊しが決まっているくらいボロい団地の一階だ。だけど侮ることなかれ、そのおかげでペット飼育可能物件で、かつファミリー向けの間取りなのでそこそこ広い。家賃も安く、その分貯金して、五年後にはそれを頭金にちよつと田舎に中古の一軒家を買う予定なのだ。伊達に銀行勤めはしていない、おそらくローンの

審査も通るだろう。

「モコー！ カイ！ ただいまー！」

手早く玄関の鍵を開けて廊下を通り、同じ言葉を繰り返しながらリビングの扉を開ける。ぱつと視線を落とすと、入り口で二匹がお行儀よく並んで私を見上げていた。

このお迎えこそ、猫飼に至福の一時である。

ミルクティーみたいな優しい毛色をした茶トラのモコは、一声鳴いて私のふくらはぎに身体を擦りつけた。これがモコのお出迎えて、毎回頬ずりしたくなるほど嬉しくなる。ちなみにサビ猫のカイは私を綺麗に無視して、リビングの扉をするりと抜け、廊下に出ていってしまった。

「カイーちよつとくらい、勞つてよー」

つれないカイに、しかも面を作つてそう文句を言ってみるものの、返事をするようにゆっくり左右に揺れた尻尾に、ついへにやつと頬が緩む。

今日はちよつと暑いから、きつと洗面所に行くのだろう。

あの狭い手洗い場にぴつたりと収まってまどろむのが、ここ最近の彼のブームなのである。

にゃああ、と膝に手を伸ばしてよじ登ろうとするモコを抱き上げ、お腹に顔を埋めてその柔らかさを堪能する。

「あー……癒される」

『今日もお疲れねえ』

そんな返事をするように、また短くモコが鳴いた。

…気まぐれでも人懐っこくても、猫は可愛いのである。

とまあそんな感じで、愛猫のモコとカイ、一人と二匹暮らし。

お年頃だけど彼氏はいないし、作る気もない。——なんて言っちゃうと、ただの負け惜しみに聞こえるだろうけれど、前の彼氏との別れ方が最悪だったせいで、今でも恋愛事はただただ面倒とか思えないのだ。

思い起こせば前の彼氏は服装から言葉遣い、仕草に至るまで自分の好みを私に押しつけ、その傲慢ぶりは相当なものだった。

『ただでさえ小さくて色気ないのに、そんな子供っぽいもん持つなよ』

デートの途中で寄った雑貨屋さんで、当時お迎えしたばかりだったモコそっくりの猫の形をしたポーチを手についた途端、当時の彼氏は嫌そうに鼻を鳴らしてそう言い放った。

もちろんイラッとしなかったわけじゃない。けれど初めての彼氏だったこともあり、趣味を押しつけるのはよくない、とポーチを棚に戻してその場は我慢した。いくら猫ブームといったって嫌いな人がいるのは理解していたからだ。

それ以来私は涙ぐましい努力をし、猫グッズは鞆に入る小物だけで我慢し、猫が苦手そうな彼氏に気を遣い、デートは外か彼氏の家で会うようにした。

だけどある日、飲み会終わりに私の家の方が近いからと、急にやってきて、『なあ。この部屋、獣くさくないか？ 俺が来る時くらいどっかやれないの』とのたまった彼氏に——私は盛大にキレた。

むしろお前が出ていきやがれ、と。

おそらく少し前から彼氏と二匹がのった天秤は、拮抗していた。そしてその一言で、完全に二匹の方に傾いてしまったのである。

『猫馬鹿とかキモイんだよ！ お前なんか誰にも相手にされねえから！ こっちから別れてやる。いいか、俺が振ったんだからな！』

彼氏の子供っぽいマウンティングに、怒りからくる火事場のなんとやらで、荷物と共に彼氏を蹴り出し、その後私は散々我慢していた猫グッズをネットで買い漁った。

戦利品に囲まれた時の爽快感といったら、今までどうして我慢できていたのだろうと首を捻るほどだった。あの清々しさは今も忘れられない。

二年間、しかも初めて付き合った彼氏だった。寂しくなかったとは言わないけれど、その穴は猫達で埋めてくれた。

結論。猫さえいれば彼氏はいらない。

そして今現在も、何かと神経の使う仕事で気力体力ともにごっそり奪われる日々を癒してくれるのは、この二匹なのである。あの日の私の選択は正しかったと、自分で自分を褒めたい。

仕事着のまま、二匹のご飯の減り具合をチェックして、トイレの砂を交換する。それから、手早くシャワーを浴びた。

そして膝にモコを抱っこしながら作り置きのカレーを温め直し、キッチンから和室へと持ち込む。食卓は、冬は炬燵にもなる、おしゃれとはほど遠い昔ながらの座卓だ。元々猫のためだけに買っ

ただけれど、案外暖房効率が良くて私も気に入っている。そんな座卓の天板の端っこに置いていたスマホが震えてメッセージ着信を告げた。

「うーん？ 麻子だ。何だろう」

一人暮らしならではの行儀の悪さで、スプーン片手にメッセージ画面をタップする。

麻子というのは小学校からの幼馴染みで気の置けない猫仲間だ。数年前から『ノアール』という猫カフェを経営している。実はモコとカイも、麻子から譲ってもらった猫だ。

ここなら飼ってくれるだろうと思うのか、お店の前に飼えなくなった猫を捨てる人が時々いるらしい。まさしくモコとカイもそんな猫だった。当然ながら猫カフェといっても無限に飼えるわけではないし、性格によつてはお店の猫スタッフとして働けない子も多い。

元々は一匹だけ飼うつもりで、一番最初に寄ってきてくれたモコを引き取っただけで、一向に人に懐く様子を見せないカイの里親がなかなか見つからないと聞いて、思い切つて二匹お迎えしたのだ。

麻子のメッセージアプリのアイコンは、ノアールで一番人気のミルクちゃん。愛想はあまりないけれど、その名のとおり真っ白で、オッドアイがとても綺麗な美人さんだ。ホーム画像はお店の外観の写真で固定されているけれど、宣伝も兼ねているのか麻子のアイコンはころころ変わる。

『明後日予定がなかったら、十八時からヘルプお願いできないかな？』

その下には土下座している、コミカルな猫のスタンプが三つも並んでいた。

モコとカイの世話をするにあつて色々相談に乗ってもらっているし、二匹のフードやおやつを

業者さんに頼むついでに卸値で購入させてもらっている恩もあるので、お店が大変そうな時はお手伝いに行っているのだ。

それになんて言つたつて猫カフェである。色んな猫がいて、とても楽しい。

猫好きのお客さんとの会話も面白いし、私としては一石二鳥なので毎回ボランティアでいって言うんだけど、次の日には時給分きつちりの金額が口座に振り込まれている。頑なに断ると気軽に頼めなくなるかな、と思つて結局受け取っているうちに、ちよつとしたお小遣い稼ぎになつてしまった。

「サービスマはどことも大変だねー」

おそらく、スタッフの確保ができなかったのだろう。

人手不足はウチの銀行でも顕著に表れていて、以前は五人以上いた派遣さんも、今は二人しかいない。人は減つていくのに、営業目標の数字は何故か増えるという矛盾。なので月末はみんなピリピリしているのだ。

十八時ならラストまで入つても二時間だから、それほど負担じゃない。特に予定はないし、麻子の店に行くのも久しぶりだ。

『いいよー』と返事を送ると、感謝の絵文字が踊つて返つてきた。そのキャラクターも猫である。ブレないなあ、と私はくすりと笑つてスマホを座卓に置いたのだった。

日曜日の朝。寒いけれど、家のベランダから見た空は高く、よく晴れている。

細々とした家事や洗濯をして、毛だらけの毛布とモコとカイのベッドも外に干しておく。

意外なことに猫を飼ってから、私の部屋は見違えて綺麗になった。

前は洗濯した服を取り込んでカーテンレールに吊るしたままだったり、畳んでもソファの上に放置したりと明らかに荒れていた。正直、掃除機だつて週に二回かければいい方だった。

それが今や部屋に取り込んだ洗濯物は、さつさと畳んできちんと箆筒たんすにしまう。なぜなら、そうしないとカイとモコが、せつかく畳んだ洗濯物にじやれて遊んでしまうからだ。

二匹の誤飲が怖いので掃除機もマメにかけるようになったし、絨毯じゅうたんもすぐ毛だらけになってしまったので、気が付けばコロコロしている。

むしろぐうたらな人こそ猫を飼った方がいい。母からも、あんたは猫を飼ってよかつたわね、なんて言われるくらいなのだから。

「じゃあ、モコ、カイ。お出かけてくるね。お土産みやげ買ってくるから」

足に纏わりつくモコを抱き上げて頬ずりし、その近くにいたカイは撫でるだけに留める。

カイは基本的にクールで、あまり触られるのが好きじゃないのだ。男の子は人懐っこくて、女の子の方が懐きにくいなんて聞いたことがあるけれど、ウチは正反対らしい。ついでに、サビ猫は基

本的に愛嬌があつて人懐っこい子が多いと言われている。つまり色々な猫がいるということだろう。

「お土産みやげはカイが喜ぶものだからねー」

ちつともこつちを向いてくれないのが寂しくて、思わせぶりなことを言ってみるけれど、カイは『あつそ』とでも言うように、素っ気なくベッドの方に歩いていった。

麻子のお店で猫メニユーとして出している高級サラミは、カイのお気に入りだ。モコはチューブ状のあの馴染みのやつが大好きだけど、カイは缶詰の高級感が好きらしい。たまに料理に使うツナ缶を開ける音にすら、普段のクールさが嘘みたいにすごい勢いで飛んでくるのだ。

……その後のがっかり顔が絶妙に可愛くて、いつもにやにやしてしまう。ただ、それをやるとものがすぐ機嫌が悪くなるので、本人的には騙だまされたと怒っているのかもしれない。

「いつてきますー！」

私は再び二匹に向かってそう言うと、リビングの扉を閉めて玄関へ向かった。二匹が間違つて外に出たりしないように、ドアの開け閉めは各部屋でこまめにするようにしている。

麻子の店は電車に乗って、銀行とは反対の二駅向こうだ。賑やかな繁華街から少し離れた場所にある、一見さんいちげんよりも常連さんが多いお店だった。

黒猫のイラストと『猫カフェ・ノアール』と描かれた看板が掲げられているビルの二階。

猫カフェとしては看板も外装もシンプルで落ち着いていて、一見普通の喫茶店に見える。壁側にある本棚には、麻子のお母さんが趣味で集めたという推理小説がぎつしりと並んでおり、猫と遊びに来たつもりが、つい小説を読み耽ふけってしまうお客さんも多い。

ほんの少し黴っぽい匂いが、いい感じに猫もお客さんも落ち着かせてくれる、居心地の良い空間になっているのだ。私もお客さんとしてなら、何時間だつていたいくらい。

私は階段を上がり、お店の入り口のガラス戸を開ける。続いて、猫が出ないように二重扉にしてある奥の扉を開けると、からん、とドアベルの音が鳴った。

受付さんは初めて見る女の子だった。きつと新しいアルバイトの子なのだろう。だけど私がヘルプに入ることは聞いていたらしい。お互いに軽く会釈をして、私は店の奥にある厨房に向かった。

このカフェのメニューは全て、調理師免許を持つている麻子の手作りだ。だから店が開いている時間、麻子はたいてい厨房にいる。

厨房の暖簾を潜って顔を出し、忙しそうに動いている細身の背中に声をかけた。

麻子がぼつと振り返る。

高い位置で一つ結びにしていた麻子の髪が、猫の尻尾みたいに大きく揺れた。

「和奏！ 休みの日にごめんねー！ すっごい助かる！」

エプロンで手を拭きながら、入り口の方へ駆け寄ってくる。めいっばい眉尻を下げた麻子に、首を振った。

「いいって。だけど代わりに例の缶詰、また卸売価格で売ってほしいなあ」

カイのためにちよつと図々しいおねだりをする、麻子は噴き出すように笑って快諾してくれた。

「カイはアレ好きだもんね。モコの分はどうする？」

「そつちもあれば嬉しいかも。でも家にまだあるから一箱でいいよ」

そんなやりとりをしながら、厨房の小窓から店内を見渡す。

猫スペースに二人、飲食スペースには二組のグループが入っていた。この時間にしては、客足は多い方だろう。

この猫カフェはフードメニューが豊富なので、料理目当てで来る人も多い。温かい料理も多いから、猫がお皿をひっくり返して火傷などしないように、あえて飲食スペースと猫スペースを透明なアクリル板で仕切り、猫が行き来できないようにしてあるのだ。

その時、からん、と来客を告げる鐘が鳴り、制服姿の女子高生が三人、おしゃべりしながら入ってきた。

受付にいた女の子が「いらっしやいませ」と挨拶した後、たどたどしくこのカフェのルールを説明していく。

麻子曰く先週入ったばかりの新人のスタッフらしい。今はまだ大変そうだけど、同じことの繰り返しなので、週一のシフトでも半年も経てば一連の文言を暗唱できる子も多い。頑張れ〜！ と心の中でエールを送り、私は再び麻子に向き直った。

「私、給仕に入る？ それとも猫スペース？」

「猫スペース！ 給仕はもうすぐ来るから大丈夫なの。ちよつと汚れてるから、悪いんだけど掃除してもらえる？」

「了解」

私はこくりと頷いて、厨房の手前にあるスタッフルームの扉を一応ノックしてから中に入る。

もう何度もバイトをしているので、すでに勝手知ったる間取りである。

臨時スタッフ用のロッカーからツナギを取り出す。制服である薄ピンクのツナギはなかなか派手だけど、一説では猫が好きな色らしい。

デフォルメされた猫の絵とお店のロゴが入っているポケットは大きくて……アラサーが着てもいいのかと迷うほどに可愛いので、これだけはいまだに慣れない。

着替えて髪をまとめようとして、ゴムを忘れたことに気付く。

給仕じゃないからいいか、と思いつながら最後におかしなところはないかと、入り口の鏡に全身を映してみた。

ツナギの上はほぼすつぴんという、あまりに色気のない姿を改めて見つめ、思わず苦笑する。化粧品匂いが嫌いな猫もいるので、ここに手伝いに来る時はすつぴんかつ、それを誤魔化すための伊達眼鏡だ。

……これ、同じ銀行の人が見ても、私だってわからないだろうなあ。

銀行では化粧は身嗜みの一つだし、あまりに童顔だとお客様の中には真面目に話を聞いてくれない人もいるので、化粧は濃い目を意識している。靴も、フロア内では常に高いヒールだ。

そのせいか、以前すつぴん伊達眼鏡姿で偶然街で同僚とすれ違った時も素通りされたことがあった。声をかけると一瞬ぼかんとした顔をしてから「その声、もしかして宮下さん!？」と、ものすごく驚かれたのだ。

麻子は若く見られていいじゃない、なんて言うけれど、童顔の上にチビなので、べたんこ靴

ですつぴんだと普通に学生に間違われてしまう。居酒屋さんでも年齢を確認されるくらいなのだ。……そのたびに笑われるので、外で呑む時はしっかりお化粧をすることになっている。

『お前。ホントすつぴんだと子供みたいだよな』

ふと耳の奥で蘇った前の彼氏の声に、ぎくりとする。

……後から考えれば、あいつはタイトスカートに高いヒールを履く、完全武装した『外向きの私』だけが好きだったのだ。外だけならともかく家の中でまで、そのきつちりした感じを期待されていて、モコとカイと遊ぶために着ていた動きやすい格好で出迎えると、途端に機嫌が悪くなった。自分は量販店のスウェット姿で寛いでいたにもかかわらず、だ！

もう、なんで私、あんなに我慢してたのかな……

もはや相手がどうこうではなく、ひたすら我慢していた当時の自分自身が腹立たしい。

鬱憤が声に出そうになって、慌てて口を押さえてから、ふっと我に返った。

……いやいや、なんで今更思い出したりするかな！ ホントあんな馬鹿、思い出す時間すらもつたない！

首を振って憎たらしいその顔を打ち消した。

勢いをつけすぎて頭がクラクラしつつも、ロッカーの横の棚から、除菌スプレーと紙ふきん、その他諸々のお掃除グッズが入った籠を取り出して確認する。

猫スペースの基本的なお仕事は、粗相した場所のお掃除、猫用おやつ注文を受けること、そしてお客さんが猫と上手にスキンシップがとれるようにお手伝いすることだ。後はお客さんが無理に

抱っこしたり追いかけたりしていたら、やんわりと注意することも含まれていて結構忙しい。

猫スペースに入ると数匹の猫達が耳をぴくっとさせたり、顔を上げたりしてこちらをうかがってきた。のんびり眠っている子もいて、各々違う反応を見せてくれる。

可愛いなあ……

思わず頬が緩んで、燻っていた元彼への苛立ちがすうっと消えていく。

害はないよーと、心の中で呟きつつ、そろりそろりと動いて掃除していると、そのうちの数匹が挨拶をするように近付いてきた。この猫は本当に人間が好きで人懐っこい子が多いのだ。

猫スペースにいるのは何度か見たことのある常連さんで、二人とも猫を膝に抱っこして本を読んでいた。せっかく猫カフェに来たのにもつたいないと思う人もいるかもしれないけれど、常連さんは大体こんな感じだ。あくまで自然に時間を過ごしている人が多い。

……実は少し気になるのが、さっき入ってきた女子高生のグループだ。時折上がる甲高い笑い声に、一部の猫がソワソワしているのがわかる。

ここは猫が自発的に膝に乗らない限り、抱っこが禁止だったりとわりと規約が厳しい。受付でフラスシュ禁止など諸々含めて伝えてあるはずだけど、あの様子だと真面目に聞いていなさそうで心配になる。

さりげなく注意事項の看板を見やすい位置に移動させていたら、来客を告げるドアベルの音がちらんと鳴った。

「いらっしやいませー」

猫スペースから少し遠いながらも、私も挨拶をする。

振り向いて入り口の方を見て、顔を戻し――

「――!？」

思わず二度見して、言葉を失った。

「あ。い、いらっしやいませ。……あの、名様ですか……?」

明らかに焦っている受付の新人さんの声に、はっと我に返る。咄嗟に爪研ぎを兼ねた巨大猫タワーの後ろに隠れてしゃがみ込んだ。

「一人でも大丈夫ですか」

低いのによく響く声は、恐らく間違いない。

直接話したことはないけれど、毎月MVPを獲得しているので、表彰された時の挨拶でその声は何度も聞いていた。素直に素敵だな、と思っていた少し低い、よく通る声。

「なんで……」

思わずそんな呟きを零してしまう。

なんで、あの『オオカミ部長』がこんな場所に……!？」

そう、窮屈そうに身を屈めて扉から入ってきたのは、あの法人営業部の大神部長だったのである。……ね、猫好きの彼女とデートとか？

一番可能性の高い答えを引き出してみるけれど、大神部長なら彼女がいくら行きたいって言っても断りそうだ。……むしろ、猫好きの彼女と付き合いそうなイメージすらないんだけど！

あれ、でも今一人でも大丈夫ですか？ っって聞いたよね!? それって大神部長が一人で猫カフェに来たってこと？

「……」

見間違いか人違いだと自分に言い聞かせて、キャットタワーの陰からもう一度受付をうかがってみる。一昨日見たばかりのグレーのコートに、猫カフェでは違和感しか覚えない鋭利な横顔がちゃんとそこにあつた。

……間違いなく大神部長である。

狼だよ狼！ 猫ちゃん達大丈夫？ 怖がって出てこなさそうなんだけど！

もう頭の中はパニック状態だ。

仕事帰りなのか、スーツ姿なので店内ではかなり浮いている。受付の新人さんはそんな大神部長に若干引き気味だ。

しかもそんな受付の様子に、飲食スペースにいる女子高生の集団が気付き、いつそう騒ぎ始めた。

「リーマンだ」

「えー、あんな人が猫カフェとか可愛い〜！」

そんな声が聞こえたのだろう。大神部長はちよつと身体を引いて、眉間に皺を寄せた。

女子高生達からは見えないのだろうけど、まるで睨んでいるように見える。すでに受付の新人さんは泣きそうだ。

「駄目ですか？」

いつまでも返事をしない受付の女の子に焦れたのか、大神部長が急かすように言葉を重ねた。

そんな余裕のない態度もどうにも彼らしくない。……とはいっても、噂でしか私は彼のことを知らないのだけど。なんとなく余裕綽々なイメージがあつたのでそう思ってしまった。

「え……!? あ、大丈夫です……! ご利用は初めてですか？ 初回は説明がありました——」

ようやく返事ができたのに、大神部長の迫力にすつかり萎縮してしまった新人さんの説明は先程以上にたどたどしい。

私も一旦背中を向けて、考え込む。

大神部長が猫カフェに来たなんて、誰に言っても信用してくれないだろう。……いや、そんなことを誰かに言おうものなら、喉元を食い千切られて口封じされてしまえそうだ。

頭の中に猫を啜えた狼の姿がやけにリアルに浮かんできて、ぞつとする。

だけどあの落ち着かない様子から察するに、大神部長だつてこんな場所に来ていることをあまり人には知られたくないみたいだ。会社の同僚、しかも女子なんてその最たるものじゃない？

気まずい以上にこの場に私がいることがバレたら、普通に脅されそう……なんて思つて——私は今更ながらまったく別の、とても重要なことに気付いてしまった。

と、その時、たすきがけにしていたスタッフ用の携帯が震えて、ドキッと心臓が跳ねる。

慌ててタップし、耳に近付けた。

受話口の向こうから聞こえてきたのは麻子の声だ。

『今入ってきた男の人、一人客らしいから。まああんなイケメンが盗撮とか考えにくいけど、一応

気をつけて見ていてね』

「どうやら厨房から受付を見ていたらしい。」

小窓から受付やそれぞれのスペースが覗けるようになっていたので、念のため注意喚起しようと電話をかけてきたのだろう。私は急いで携帯を抱え込み、小声で答えた。

「麻子やばい。あの人、同じ職場の人！」

私の勢いにちよつと驚いたらしい麻子は、少し間をあけて答えた。

『そうなの？ じゃあ延長料金サービスしてあげてもいいわよ』

「違う！ そうじゃなくて！ あの人、他の部署の部長さんなんだけど、うちの銀行、副業禁止だからバレたらまずいかも……！」

そう。うちの銀行は副業絶対禁止なのだ。

こんな風に、お店の名前がデカデカと印刷されたツナギ姿で見つかったら言い逃れできない。

『え、マジ!? やばいんじゃないのソレ！ とりあえず奥に引っ込んで！』

「うん！」

急いで電話を切り、踏み出しかけたところで、ぴたっと足を止める。

受付を終えたらしい大神部長が、猫スペースの方へ向かってくるのが見えたのだ。

猫スペースの出入り口は一つしかない。このまま私が入り口に向かえば、当然鉢合わせすることになる。かといって、このままここにいっても、大神部長が入ってくれば、逃げることはできなくなってしまう。

通常なら飲食スペースでドリンクやフードを注文してから、こっちに来るお客さんが多いんだけど、あの様子だと受付で注文を済ませてしまったのだろう。

少しでもたくさんさんの時間、猫達と触れ合いたいという人はそうすることも多いけど、……あの大  
神部長が？

——いや、さすがにナイナイ。

自分でそう突っ込むものの、すぐにそんな場合じゃないと気づき、少しでも見つかりづらいように身を縮こませた。

一呼吸の後、とうとう大神部長が扉を開けて猫スペースに入ってきた。

突然の大男の登場に、猫達はそれぞれタワーやお客さんの背中や足元に隠れて、大神部長をうかがっている。元々、スタッフは全員女性だし、お店に来るお客さんも女性が多い。あまり男性と触れ合う機会がないので、大神部長のような大柄な男性は苦手な猫が多いのだろう。

読書をしていた常連さん達もそんな猫達の背中を、宥めるように撫でてくれる。かくいう私も、中途半端に屈んだ膝の裏に潜り込もうとしていた猫の頭を自然と撫でていた。

大神部長は入り口から一歩入ったところで、立ったままである。

仁王像並みにすごい威圧感を発しつつも、どこか迷っているように視線がさまよっている。

その背中に小動物を捕食してきた狼の幻が見えたその時、扉が開く音がして受付の女の子の声が聞こえてきた。

「あ、こちら高級ささみです……。コーヒーはあちらにご用意しておりますので」  
大神部長の体格が良すぎるせいで女の子の姿は見えないけれど、どうやら大神部長が注文した猫用のフードを持ってきたらしい。

「どうも」

振り返ってそう言い、小さな器を受け取った大神部長は、ファンシーな豆皿に入ったささみの端つこを摘み上げ、まじまじと眺めている。

その間に受付の女の子は逃げるように出ていってしまった。ちなみに私は完全に逃げるタイムイングを失っている。

猫達もごちそうの匂いにひよいと顔を上げたものの、身体は大神部長から一定の距離を保っている。さすがに食欲よりも防衛本能が勝つらしい。

一番近い場所にいたオッドアイの白猫——ミルクちゃんのところに向かった大神部長だけど、残念ながら彼女はそれほど高級ささみが好きじゃない。

ミルクちゃんは大神部長の影が差すよりも早く、キャットタワーの一番上まで駆け上がっていった。

その次に近い場所にいた一回り小ぶりのハチワレのタロウも、ぴょんと大きく跳んでトンネルに逃げ込んでしまう。

……そこは屈んで近付いて〜！

思わず口に出してしまいそうになったのは、悪気がないことがなんとなくわかったからだ。微

妙に眉尻が下がったから、多分大神部長は猫達に逃げられて落ち込んでいる。些細な変化だけれど、日々猫相手に会話をしていると、ちよつとした違いも見逃さなくなるものだ。……とはいえ、まさか人間に応用できるとは思っていなかった。

溜息をついた大神部長が振り返った途端、絨毯の上にいた何匹かが同時に逃げていった。おかげでこっち側半分の猫密度が高い。

自然と生まれた密度差に、大神部長の背中に哀愁が漂う。

密かに見守っていた常連さん達も、そんな大神部長の様子に、とりあえず害はなさそうだと判断したのである。

一人はスマホで猫の写真を撮り出し、もう一人は苦笑しながら、ちらりと私を見た。

——助けてあげないの？ そんな声が聞こえてきそうな視線に、私はへらりと曖昧な笑みを返す。

そうだよ。あんなコミュニケーション下手なお客さん、スタッフとして声をかけない方がおかしいよね……

私は小さくなったまま、ずれてきた眼鏡を指で押し上げた。

そして少しずつ冷静になってきた頭で考える。

……そもそも、滅多に見えない窓サの女子社員顔なんて覚えてないんじゃない……？

私と大神部長は、会話はおるか一メートル以内で顔を合わせたこともない。銀行の共用スペースである食堂や休憩所で彼を見かけたこともないと思う。

くわえて今の私は靴下のみで靴を履いてないから、身長も低い。何よりすっぴんの眼鏡姿だ。

…毎日顔を合わせている同僚だってわからなかったんだから、大神部長相手なら絶対にバレないんじゃないだろうか。

魔が差した——まさにこの時の私のことである。

そのままやり過ごせば、何事もなくすんだかもしれないのに、同じ猫好きかもしれない大神部長の、あまりの避けられっぷりに少なからず同情してしまっただの。

——ちよつとアドバイスするくらい、いいよね？

うん、その後にさりげなくこの部屋を出ていけば、きつと問題は起こらないはず。

——よし。

意を決して、私はキャットタワーから離れ、大神部長にそつと近付いた。

「あの、しゃがんで近付けば逃げないと思いますよ。もしくは黙って座っておやつを持っているだけでも、向こうから来てくれると思います」

私は猫を気にしている素振りで視線を明後日あさってに向けたまま、そう声をかける。

そう。何しろ彼が持っているのは、みんな大好き高級ささみだ。ミルクちゃんちやんは例外として、普通なら猫ダンゴ状態になってもおかしくないハーレムアイテムなのである。

突然湧いて出た私に、大神部長は驚いたようだ。

沈黙が落ち、余計なお世話だったかな、と不安になった頃、大神部長はようやく「そうなのか」と返事してくれた。そして素直にその場に腰を下ろす。私はそれを横目で確認して、ほつとした。

……これで猫達も近付きやすくなっただろう。

私の背中側から猫達がそろりと集まってくる気配がして、よしよし、と内心ほくそ笑む。

だけど、今のこの体勢で大神部長に下から顔を覗き込まれたら、素顔が見えてしまうかもしれない。顔の高さがある程度揃えた方が、眼鏡がいい働きをするのでは？

少し迷ったものの結局、私もその場に腰を下ろして、様子をうかがう。

だけど思っていた以上に猫達は慎重だった。掴みは良かったのに、なかなか近付いてきてくれない。アドバイスした手前もあり、続く沈黙に居た堪れたまたまなくなった私は、若干声を高くして大神部長に質問を投げてみた。

「猫、お好きなんですか」

「ええ。男一人でこんなところに来るくらいですから」

意外にもあつさりとは肯定されて、少し驚く。

そうか。もしかしたら罰ゲームの可能性もあると思っていたけど、大神部長、普通に猫好きでここに来たんだ……

思いがけない同好の士の登場に盛り上がりたくなるけれど、さすがにそんな危険は冒せない。

続ける言葉に迷っていると、大神部長は私が口を開くよりも先に、自嘲気味に笑って首を竦すくめた。

「だけど、どうやら猫には嫌われる性質チみたいですよ」

……思いつきり大神部長が避けられているのを見た上で声をかけたので、今更「そんなことないですよ」なんて見え透いた否定はできない。

確かに男の人だし、大きいから猫達が怖がるのはわかる。……だけど、それだけであんなに避け

られるものだろうか。

先程の様子を思い出して私は首を傾げた。

「……あの、ずっとあんな感じですか？」

思わず尋ねた私を意外に思ったらしく、大神部長はわずかに目を見張ってから、少し考えるように視線を天井に向け顎を撫でた。

「まあ、前から特別好かれる感じではなかった……が、最近は特に嫌われている気がするな」

そうは言いつつも、大神部長はどうやら無理に猫達に触るつもりはないらしい。

その時点でかなり好感度がアップし、どうにか触らせてあげたいと思った。周囲をうかがうけれど、まだまだ猫達の警戒心は解けておらず、一定の距離を保ったままで。

……だけど、猫好きなのに嫌われるとか、かなり切ない。

雰囲気は怖くても、よっぽど臆病な猫以外なら時間をかければ慣れてくれるし、このお店の子は大部分が人懐っこい子だ。今日は残念ながら閉店まで一時間を切っているから難しいけれど、今度来ることがあったら二時間コースを勧めてみようかな。

そう思って、顔を上げたその時。

——あ。

私は目の前の大神部長の表情に声を上げかけ、慌てて口を閉じた。

眉は厳めしく吊り上がったままだけれど、緩んだ目元に皺が浮かんでいて、それがいくらか彼の雰囲気柔らかくしていた。視線の先はトンネルで追いかけてこをしている猫に注がれていて、ち

らりちらりと猫の顔や尻尾が見えるたびに、やんわりと口の端が上がる。

——銀行では見たことがない優しい表情に、思わず目が釘づけになってしまう。

……こんなレアな表情、初めて見た。

松岡さんだったら写真を撮っていたかもしれない。

なんだか、ちよつと緩んでいる……というか、ぼうつとしている感じ。普段とのギャップが大きすぎてなんだか可愛く見える……と、驚いていると、大神部長はふつと俯いて欠伸を噛み殺した。

すぐに顔を上げたけれど、その目は少し潤んでいて瞼も若干重そうだ。

……あれ、ちよつとお疲れ……？

確かに銀行にいる時とは違い、その表情は冴えない……というか、今更だけど顔色があまり良くない気がする。

実際、スーツを着ているくらいなのだから、日曜日の今日も仕事だったのだろう。

休日出勤をしなければならぬほど、法人営業部は忙しいのだろうか。

本社からの成績優秀賞の報奨金で、窓サである私も銀行内の飲み会の会費が少なくなったり、営業成績の目標が緩くなったりと大神部長の恩恵を受けている自覚はあるので、なんだか申し訳なくなってきた。

暖房が暑かったのだろうか、大神部長がコートと上着を脱いだ。シャツ一枚になったことで男らしい体躯が露わになり、きやあつと、飲食スペースで歓声が上がった。

歓声の主は、すっかり頭から抜け落ちていた例の女子高生グループだ。耳を澄まさなくても、声

をかけようかと相談している声が聞こえてくる。

「……どうやら、ずっと見ていたらしい。」

ここは猫カフェであって、出逢いの場ではない……と言いつ切るつもりはないけど、明らかに大神部長がそんな気分じゃないのはわかる。

他のお客さん達も、若干居心地が悪そうだ。

女子高生がこっちに来るかなーと気にしていると、大神部長が不意に口を開いた。

「気を遣わせて悪いな」

苦笑混じりの謝罪には、今の女子高生の反応以外にも色々含まれているのだろう。例えば受付の新人さんを怖がらせたことや、猫達や他の常連さん達の反応とか。

咄嗟とつさに顔を上げてしまったけれど、幸いなことに大神部長はキヤットタワーを見たままだった。慌てて、顔を見られないよう下を向いて、だけどちゃんと否定する。

「いえ、ご来店ただけて嬉しいですよ」

猫好きならどなたでも、というのが、ここ猫カフェ・ノアールの基本姿勢だ。

「男一人で来るところでもないだろう、と今まで避けてきたんだが……看板を見かけて、つい、な。ふらふら入ってしまった」

言葉の途中で大神部長は欠伸あくびを噛み殺す。よほど疲れているのか今にも眠ってしまいそうだ。

確かに男一人で猫カフェに来るのは、なかなかハードルが高い。

だけどそんなに猫が好きなら、どうして飼わないんだろう。

確か大神部長は一人暮らしだったはずだ。家で飼えばわざわざ猫カフェに来る必要もないし、何より自分の猫というものはとても可愛い。

当然であろう私の問いに、大神部長は淡々と答えた。  
「飼っても忙しくて構ってやれそうにないからな」  
返ってきた言葉に、また好感度が上がる。

自分の生活リズムや住環境をちゃんと考えて、『好きだけど飼わない』という選択肢を選んでる人は、責任感があっていいと思う。世の中にはペット禁止物件なのに、バレなきゃいいと思つて安易に飼つて、大家さんにバレて捨てる、なんて人もいるのだから。そんな風にしてもらわれてきた猫が、この中にも何匹かいるので、余計にその気持ちは強い。

「君も飼っているのか？」

そう尋ねられて素直に頷くと、どんな猫？ と質問が重ねられた。  
猫のことを聞かれると、反射的に答えるスイッチが入ってしまう。

「サビのクールな男の子と、人懐っこい茶トラの女の子です。カイとモコっていう名前の、姉弟猫なんですよ」

そう説明すると、「いいな」と子供みたいな感想が返ってきて、ほっこり胸が温かくなる。

それで、とつい猫話を続けようとした時、てしてと何か背中を叩いた。  
振り向くと、先程逃げていったタロウと目が合う。

「あ、この子！抱っこ好きなんですよ」

もしかして抱っこさせてくれるかな、と期待して紹介すれば、タロウはたたたと私の背中を駆け上がって肩に乗った。小柄とはいえ成猫なのでちよつと重い。

私の首元から顔を出し、大神部長に顔を向けて何度か鼻を蠢かす。髭が頬に当たつてくすぐったいと思つた瞬間、タロウが大神部長に向かってジャンプした。

そして膝の上に綺麗に収まると、大神部長の指をしきりに舐め始める。

「今！ ささみ、あげてみてください」

突然懐に飛び込んできたタロウに驚いている大神部長にそう伝えると、彼は慌てて絨毯の上に置いたままだった小皿からささみを摘み上げた。

タロウはじゃれるように両手を使ってそれを掴み、仰向けの体勢で勢いよくはぐはぐと食べ始める。

それが合図だったように猫達が集まってきた。大神部長の膝の上に猫達が手を乗せたり、腕に乗ろうとしてくる。大神部長は目に見えて嬉しそうな顔をしていて、思わず私も頬が緩んだ。

長身の——ちよつと強面の男の人が、猫に囲まれているのってなんか可愛い。

しかも狼と猫だよ。夢の共演かも。

さつきまでつれなかつたミルクちゃんも興味を持つたらしく、そろりそろりと近付いてきた。

慌てるでもなく大神部長の膝の上に手を置いて、にゃあ、とささみを催促する優雅な姿は、さすがこのカフェの女王様である。

大神部長が表情を緩ませて差し出したささみにタロウが手を出そうとして、シャアツとミルク

ちゃんが怒る。それにも怯まずしれつと横取りしたタロウは、瞬時に身体を反転させて走り去っていった。

「許してやれよ。まだあるから」

笑ってから大神部長は最後の一個をミルクちゃんに渡した。

今度はしつかりささみを抱えこんだミルクちゃんは、大神部長の膝を跨ぐとその場で食べ始める。そしてあつという間に食べ終えると、ミルクちゃんは少し浮いていた大神部長のネクタイでちよいちよいと遊び出したのだ。

女王さまの首を傾げる可愛い仕草に、思わず携帯を掴む。

宣伝素材用としてスタップも猫の写真を撮ることを許可されているのだ。

「可愛いな……」

「ですよねー」

私の心の声とあまりに同じタイミングでそう呟かれたので、思わず食い気味に同意してしまった。知らない間に随分距離が近くなっていたらしい。ふと気が付くと、お互いの膝はくっついており、十センチ以内で大神部長の顔があった。目が合った瞬間、大神部長の目が驚いたように丸くなったのがわかった。

「君……」

驚いたような声に、背筋がひやりとする。

バレた？ 今、確実に驚いた顔をしてたよね!?

慌ててずれた眼鏡を押さえて俯くものの、頭頂部に刺さる視線が痛い。

そして何よりこの沈黙。何もないうつてことはないだろう。

やっぱり仕事のできる人は、すれ違うレベルの人の顔でも覚えられるのだろうか。

「……」

いつまで経っても黙ったままの大神部長に、もういつそ駆け出して逃げちゃおうか、と思う。

ただど飯にそうしたつて、会社が一緒なのだから待ち伏せされたら意味はない。いや、待ち伏せなんてする必要もない。仲がいらしい支店長に『窓サの子が副業してる』つて言うだけで、私は終了だ。

それはマズイ！ だつて私には養わなければいけない猫が二匹もいるのだ！

……さつき話した感じでは噂よりも怖くないし、何より同じ猫好きだ。素直に頼めば今回くらい見逃してくれるんじゃないだろうか。

それならさつさと謝った方が印象がいいかも……？

頭の中で考えることコンマ数秒。

私はミルクちゃんがびくつとするくらい、勢いよく頭を下げた。

「すみません……！！ うちの銀行が副業禁止つてことはもちろん知ってます！ だけど、ここ友人の店でスタッフが足りない時だけ手伝つてるんです！」

他のお客さんの手前小声で、でも真面目にそう説明する。けれど、大神部長は返事すらしてくれない。

「あの、だから支店長には言わないでもらえると嬉しいんですけど……！！」

ますます焦つて一気にそう言い放つたものの、やっぱり返事はない。

いったい、どうしたんだろう。

ちらりと顔を上げると、大神部長はなぜか私をじつと見つめ、驚いてる……ッポイ？

……あれ、もしかして私、早まった……？ 最初に思ったとおり、私が同じ銀行に勤めているの

なんて全然知らなかった……？

え、じゃあ、さつきの沈黙と驚きの表情は一体!?

パニック状態で次の言葉を探しているうちに、大神部長ががらりと表情を変えた。

その表情は先程猫を見ていたものとは全く違う。

一度だけ見た、商談をまとめている時の表情と同じものだった。ノーとは言わせない威圧感と、同時に彼に任せておけば大丈夫という頼もしさ——そしてどこかゲームを楽しむような余裕めいた瞳が印象的だ。……端的に言えば、いかにも獲物を狙う狼っぽい。

……背中が寒くなったのは気のせいだと思いたい。

自身の顎を親指と人さし指で撫でる大神部長を見ているうちに、なんだかいたぶられている気分になつてきた。

沈黙に耐えかねた頃、大神部長がようやく口を開いてくれた。

「そうか、うちの銀行に勤めたのか。確かにうちの支店長、そういうところには厳しいもんな」

やっぱり自爆していた……！！

自ら暴露してしまつた間抜けさ具合にその場に突つ伏したい気分だつたけれど、存外優しげな口調に、私は一筋の希望の光を見出した。

これはイケる！

「つお願ひします。今日で最後にしますから見逃してください！」

副業をしていた女子社員が、停職になつたことがあると、以前松岡さんから聞いた。しかも、結局居づらくなつてそのまま辞めてしまつたとか……

そろりと顔を上げると、大神部長の顔にはわかりやすく、楽しそうな表情が浮かんでいた。

「あの……?」

「どうするかな。支店長とは昔からの知り合いなんだ。あの人の査定にも響くだろうし……」

「そ、そのところをなんとか……!」

まずい。このままじゃ職なしだ。自分とはかく、カイとモコを飢えさせるわけにはいかな  
い……!

頭の中をフル回転させると、なぜか脳内でモコが追いかけてきた。ふわつとしたその尻尾を掴むように、ぴん、と閃いた。

そうだ!

「あ、あの! 良かったらウチに遊びに来ませんか!」

「え?」

「さつきも言つたとおりウチにも猫がいます! えっと、ほら! こういう場所にはやっぱり来づ

らいですよね? うち、一匹はものすごく人懐っこくてお客さん好きなんで、好きなだけスキンシップできると思います!」

名付けて『猫で気を引いて仲良くなつてしまおう』作戦!

ぐっと拳を握り締めて力説すれば、大神部長は私の勢いに驚いたらしく、数回目を瞬かせた。

そして戸惑つたように顔を傾ける。

「……家に遊びに行つてもいいつてことか?」

「え? そう言つてるつもりですけど……」

「……まあ。そうしてもらえると嬉しいが」

——お、いけそう!

確かな手応えを感じて、心の中でガッツポーズをしかけたその時——がしゃんつとガラスが割れる音が店の中に響いた。

「きゃあ!」

次いで聞こえた悲鳴に、慌ててそちらを見る。

いつのまにか猫スペースに入ってきていた女子高生が、猫スペースと飲食スペースの間にある扉を、開けっ放しにしていたらしい。猫が飲食スペースに入り込んで、食器を引つ繰り返してしまつたようだ。再び、がしゃんと食器が割れる音とお客さんの悲鳴が聞こえ、私は慌てて立ち上がった。「すみません! 続きはまた!」

そう言つて大神部長を残して駆け出し、猫スペースの扉をきつちり閉める。

出ていったのは悪戯好き猫が三匹だった。

受付の女の子が一匹確保するのを確認してから、飲食スペースを見回してあとの二匹を探す。騒ぎに気付いて出てきた麻子がもう一匹を確保し、残りの一匹は苦労の末、私が確保した。

その後、猫達の可愛い肉球を傷つけるわけにはいかないので、すぐに掃除道具を取りに行く。お客さんに対してはすでに麻子がフォローしており、女子高生のグループはそそくさと逃げるようにお店から出ていった。本当に最後まで人騒がせなグループだ。

「ガラスが刺さってないか、チェックしてくるね」

一旦三匹をゲージに入れ、怪我をしていないかチェックをすると、幸いなことに上手に避けたらしく傷らしきものはなかった。ひっくり返したのはコーヒーカップだったので、火傷してないかも確認するけれど、温くなっていたようで、そちらも大丈夫そうだった。

ただどコーヒーを直接被ってしまったので、毛色はすっかりまだらに染まっている。もちろんそのままにしておくわけにはいかず、給仕係のスタッフと二人がかりで手早く洗い上げた。

そうこうしているうちに、いつのまにか閉店時間になっていたらしい。

麻子にドライヤーのある場所を聞こうと一旦飲食スペースに戻ると、後片付けをしていた麻子が手を止め、にやにやしながら近づいてきた。

「もう和奏が驚かせるから焦ったけど、うまいこと話をついたみたいね。彼、最後まで和奏のこと待ってたわよ〜」

……すっかり忘れていた大神部長の存在。

そういえば話も途中でぼっぼり出したままだった。

だけど最後まで待っていた——なんて、よほど家に来る話を詰めたかったのだろうか。

思わず考え込んでしまった私の隙をつき、バスタオルで包んでいた猫が、急に暴れて腕から飛び出した。

「いたっ！」

おそらくシャンプーが不本意だったのだろう。腕に派手な猫パンチを喰らってしまった。袖を捲っていたせいで剥き出した腕に薄く血が滲む。

……まさに踏んだり蹴ったり。

そんなことを思いながら、私は再び捕まえた猫を宥めて、丁寧に水分を拭きとっていったのだった。

十

——ありえない場所で、ありえない人と鉢合わせてしまった翌日は月曜日で、ただでさえ気が重い。その上ガラス越しに見える雨にやむ気配はなく、いつそう気分が滅入ってきた。

お昼少し前の今は、お昼休みにやってくるお客様に備えるようにすつと波が引く時間帯だ。

手持ちの仕事を終え、手持ち無沙汰気味に机の上を整理していると、松岡さんが声をかけてきた。

「ねえ、あの子。本社から出向してきた新人じゃない？」

耳元でぼそりと呟いた松岡さんの視線を追う。すると、階段脇のＡＴＭコーナーに、ワンピースにノーカラーのジャケットを合わせた清楚な雰囲気の女の子がいた。その首には名札がかかっている。

確かに松岡さんが言うとおり、今年本社から出向してきた新卒の女の子だ。

確か渉外部しやぶぶに配属された子で佐々木さん、だったと思う。本社から出向してくる新卒は、一年後には本社に戻る有名大学出身ばかりのエリートさん達だ。そういえば、今年の新人女子はとても可愛いと男性社員が盛り上がっていたっけ。

「あの子、就業時間内だっというのに堂々とＡＴＭ使ったわよ。部長に見つかる前にさっさと行けばいいのに」

松岡さんの言葉に少し驚いて、私は背後を振り返る。

そこに部長の姿はない。そういえば、上役達は会議でこの場にいなかった。

ほんと、いなくて良かった。窓サ部長は怒鳴って叱るタイプなので、聞いているこちらでも嫌な気分になるし、職場の雰囲気も悪くなるので見つからないに越したことはない。用事が終わったのなら、早めに業務に戻ってほしい。

ただどここちらの心配をよそに、佐々木さんはその場で、仲がいいのだろう窓口の派遣の女の子とおしゃべりを始めた。……バレたら結構な問題になるのだけれど、もしかして二人とも知らないのだろうか。

「——大神さんが——」

不意に彼女達から聞こえた名前に、ぎくつと心臓が跳ねた。

きやあきやあ騒いでいるところを見ると、どうやら彼の話で盛り上がっているらしい。

一瞬無言になった私はそろりと松岡さんを見て、さりげなく尋ねてみた。

「あの、相変わらず大神部長モテモテですね……」

松岡さんは「お」と笑顔を作って私を見る。

「ナニナニ？ 宮下さんもオオカミ部長に興味出てきた？」

「……単なる好奇心です」

「またまたあ。オオカミ部長がモテるなんて今更よ？ 赴任した時の騒ぎ以降みんな表立ったアプローチはしてなかったけど、ここ最近の活躍がまたすごいしね。新しく入った派遣の子達は前の騒動を知らないし——」

ふと、松岡さんの言葉が止まった。視線が一点に向かっていて。そちらを見ると、階段から誰かが下りてきたところだった。会議室は二階にあるから部長かと思つてぎくりとしたけれど、やってきたのは長身のパンツスーツ姿の若い女の子だった。

後ろ姿だけでもわかるスタイルの良さに感じしていると、その子が佐々木さんの前で立ち止まる。仲のいい雰囲気から、どうやらあの子も新卒の出向組らしい。横顔しか見えないけれど、確かに彼女にも見覚えがある。

「ああ、ホラ。あの子、榎本えのもとさん。あの子も大神部長狙いらしいわよ」

「へえ」

改めて見ると、遠目にもわかるくらい美人で背が高い。

ツンとした感じがノアールのミルクちゃんに似てるなあ、なんてつい明後日なことを考えていると、殊更声をひそめた松岡さんの言葉に一気に現実引き戻された。

「特にあの榎本さん。大神部長と同じ法人営業部に配属されてさあ、やっかみかすごかったらしいけれど、誰に対しても物怖じしない気の強さと優秀さで全部撥ね除けたっていうんだから、最近の若い子は強いわよね」

「ええ!? すごつ! ホントですか」

もちろん、私にはそんな気概も優秀さもない。

美人の新人が大神部長と同じ部署になっただけでやっかまれた、っていうのはなんとなく聞いた記憶がある。すぐに更衣室の話題に出なくなっただけですっかり忘れていたけれど、そんな経緯があったのか。

……あんな美人なら、お似合いだと誰もが納得しそうなのに。

うわあ。彼女でそれなら、地味な私が大神部長とわずかでも接点なんて持とうものなら、面白おかしく噂されるか、嫌がらせされるか……想像すらつかない。

「なんかすごいですね……」

もはや私の口からは、乾いた笑いしか出てこない。榎本さんのきれいな立ち姿を茫然と眺めていると、その肩越しに、楽しそうにしゃべっていた佐々木さんと目が合った。私と松岡さんを交互に見つめて、長い睫毛をばちばちと瞬かせる。

それからふつと鼻で笑ったかと思うと、ちよつと内緒話をするみたいに二人に顔を近付ける。こちらを指差して何か言っているのがわかった。その口元は緩く弧を描いていて、明らかに悪口を言われている雰囲気だ。……わかりやすく感じが悪い。

こっちも噂話をしていたからお互い様だけど、松岡さんも私も一応先輩だ。むしろ勇気があるなあ、と感心してしまった。……佐々木さんも、榎本さんに負けず劣らず気が強そうだ。

「……先輩に向かっていい度胸だね、あの佐々木つて子。清楚っぽく見せてるけど、女の子達の評判は悪いわよね。就業時間内にATM使ったの、チクつてやろうかしら」

笑顔で物騒なことを言い出した松岡さんを「まあまあ」と宥めているうちに、三人はそれぞれ散り散りになった。榎本さんは、そのまま営業に出るのだろう。二人と別れて外へ行き、派遣の女の子も自分の定位置に戻った。呑気に二人に手を振っていた佐々木さんも、入ってきたお客様の流れに乗るようにエレベーターに乗って、自分の部署へと戻っていった。

「いらつしゃいませ——」

それから続々とお客さんがやってきた。十二時を過ぎるとさらにどつと増え、発券機の番号が溜まっていく。それを捌きながらも、頭の隅つこに昨日見た、猫と戯れる大神部長の顔がちらちらと過つて、なんだか集中できなかつた。

その後——私はお昼休憩を使い、他の女子社員からさりげなく大神部長についての情報を集めて回つた。

その結果、わかつたことは大神部長は思っていた以上にモテるということ。

この支店だけではなく、本社にもファンがいるらしく、取引先でも大人気。松岡さんに聞いた新卒の二人、特に榎本さんはかなり本気らしく、積極的にアプローチしているらしい。……私が大神部長を家に呼んだなんてバレたら……

「……」

終業時間まで思い悩んだ末、私は申し訳ないと思いつつも、彼とは関わらない方がいいと結論付けた。つまり、ノアールで大神部長に会ったことを綺麗さっぱり忘れることにしたのである。

なぜなら情報収集している途中で、ふと思いついたからだ。彼が私のことを知らなかったことを。……幸いなことにあの時、私は名乗ってはいないし、所属先も言っていない。うちの支店は派遣や外交員を合わせたら結構な数の女子社員がいるし、その上あの時、私はすっぴんの伊達眼鏡だった。それに屋内だったからヒールも履いていない。目線が変わると印象も変わるはずだし、顔を合わせることもあっても、声を聞かれない限りは気付かれないのではないだろうか。

そう思い付いてしまえば、後はもう楽な方へと流されるのが私という人間なのである。

いや、うん。わかる、わかるよ!? 自分から猫見に来ますか? なんて申し出ておいて、知らないふりをするなんてありえないってことは。

だけど、今日ちらっと大神部長の名前を出ただけで、「いいよね〜!」とか「憧れる」とか夢見がちに語った女の子の多いこと! ある意味『オオカミ上司』はアイドルみたいな存在なのである。そんな中、大神部長と仲がいいなんて噂にでもなったら、一人抜け駆けしたように思われてしまうだろう。

……そもそもあのモテっぷりなら、私じゃなくても、猫を飼っている女の子の一人や二人簡単に見つかると思うんだよね。ホラ、榎本さんが猫飼ってるかもしれないし!

心の中で罪悪感を薄めるための言い訳を繰り返し、普段どおりのちよつと忙しい月曜日を何事もなく過ごした私。その日の夜には、すっかり肩の荷を下ろした気分になっていた。

しかし、その次の日。

「わっ、オオカミ部長……!」

誰かが呟いた声に、窓口の後ろで事務作業をしていた私は、咄嗟にその場にしゃがみ込んだ。そう。なんと朝から、滅多に窓口に来ないはずの大神部長が顔を出したのである。

『誰か』を探すように窓口を見回し、すぐ近くにいたコンシェルジュが、そんな彼に用件を聞こうとすると「いい」と断り、すぐに立ち去った……らしい。

これはしゃがみ込む私に「……何してんの?」と怪訝そうに尋ねてきた松岡さんから聞いた話だから、どこまで真実かはわからないんだけど。

「ケーブルに足引っかけちゃって!」

なんて苦しい言い訳をしつつ、跳ね上がった心臓を宥めるべく胸を押さえる。

た、たまたまだよね……? と自分に言い聞かせたものの、あろうことかその次の日も、大神部長はロビーに顔を見せたのである。

今度は顔見知りらしい営業に話しかけ、そのまま結構な時間、ロビーにいた。

その後、大神部長が帰ってから女子社員がその営業に何の用事だったのかと聞くと、法人のお得